財団法人
日韓文化交流基金
NEWS
The Japan-Korea Cultural Foundation
2005
no. 33
基金ホームページURL●http://www.jkcf.or.jp
発　行　財団法人　日韓文化交流基金
〒105-0001　東京都港区虎ノ門５丁目12番１号
虎ノ門ワイコービル３Ｆ
電話 03-5472-4323　　FAX 03-5472-4326
発行日　2005年3月31日

日本における韓国・朝鮮研究「研究者ディレクトリ」「研究文献」データベース

日本の韓国・朝鮮研究に関する情報提供を目的とした2つのデータベースが、日韓文化交流基金のウェブサイト上で稼働しています。

当基金では、日本における韓国・朝鮮研究に関する情報提供を目的とし、2001年からデータベース作成のための調査を行ってきました。その成果として、「研究者ディレクトリ」と、「研究文献」の２つのデータベースを作成し、インターネット上で研究情報の提供を行っています。

「研究者ディレクトリ」データベース（上左・http://www2.jkcf.or.jp/~dirsearch）は、2001年に続いて、2004年秋に調査票による再調査を行い、その結果をインターネット上のデータベースに反映させたほか、冊子体のディレクトリを刊行しました。

このデータベースには、現在、日本もしくは韓国の研究機関に所属している韓国・朝鮮を研究対象とする研究者が網羅され、氏名・所属機関・研究業績から検索ができるほか、研究領域・時代・地域のインデックスからの絞り込みが可能です。

また、「研究文献」データベース（上右・http://www2.jkcf.or.jp/~docdb/）は、東京大学の服部民夫教授を主幹とする研究チームに委託して、1945年から2001年までに日本語で発表された社会科学分野の研究業績から、経済、経営、国際関係、政治、社会学の５つの分野を対象に、調査と情報の分類を行いました。

現在、約１万件の図書および論文の書誌情報が提供されており、主題や地域によるインデックスを付した上で、検索できるようになっています。

2005年３月には、「研究者ディレクトリ」2004年調査結果の冊子を刊行しました（上）。この冊子体ディレクトリには、1079名（2004年調査当時）の研究者情報を掲載し、所属機関・研究領域・時代・研究対象地域によるインデックスを付しています。

いずれのデータベースも、インターネット上からどなたでもアクセスし、検索を行うことができます。特に「研究者ディレクトリ」では、英語による情報提供も行い、非日本語話者からのアクセスにも配慮しています。また、インターネット上で公開するにあたり、個人情報の保護に対しては、最大限の注意を払っています。

データベースを構成するデータは、今後も継続して更新を行います。

2005年度訪日・訪韓フェローシップ採用決定

2005年度の訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）の採用者が決定しました。昨年10月末日までの募集期間に、訪日67名、訪韓10名の応募があり、このうち訪日は19名、訪韓は3名が採用されました。

訪 日

（カナダ順）

氏 名	開始日 終了日	所 属	職 位	研究テーマ	受入機関
姜正仁	05.6.1 06.2.28	西江大学校社会科学大学 政治外交学科	教授	丸山真男の政治思想研究	東京大学大学院 法学政治学研究科
金相太	05.10.1 06.8.31	漢陽大学校法学研究所	研究員	国と地方間の紛争解決システムに関する研究	関西大学大学院 法務研究科
金仙姫	05.4.1 05.6.30	昌原大学校 人文学部日語日文学科	副教授	韓国語との対照を中心にした日本語後置詞の研究 ―日本語教育への応用を目的として―	東北大学大学院 文学研究科
金知妍	05.5.6 06.3.31	国民大学校日本学研究所	責任研究員	日米同盟の新たな展開と東アジアの安全保障	東京大学大学院 法学政治学研究科
南垣碩	05.8.1 06.6.30	社団法人韓国都市研究所	研究員	公共賃貸住宅政策が低所得世帯の居住福祉に及ぼす効果に関する国家比較研究 ―日本と韓国を事例に―	東京大学大学院 工学系研究科
朴明姫	05.10.1 05.12.31	アジア市民社会運動 研究院	研究員	日本における多文化社会構築のためのNGOの役割 ―国際理解教育プログラムを中心に―	特定非営利活動法人 開発教育協会
白善惠	05.5.1 06.3.31	ソウル大学校 国土問題研究所	専任研究員	小都市文化戦略としてのプレイス・マーケティングの限界と対応策の模索 ―韓国安城市と日本金沢市の文化資源と観光産業の比較研究―	金沢大学文学部 地理学教室
徐毅植	05.8.1 06.6.30	ソウル産業大学校 人文社会大学教養学部	副教授	朝鮮と日本における古代国家の二重構造とその性格	東京学芸大学大学院 人文科学系
尹岡丘	05.4.1 06.2.28	慶尚大学校師範大学 外国語教育科 日本語教育専攻	教授	第二言語学習者の語彙学習ストラテジーに関する研究	大阪外国語大学 外国語学部
尹相吉	05.9.1 06.7.31	ソウル大学校 言論情報学科	博士課程 修了	旧韓末から日帝期までの郵便・電信・電話についての社会文化史的研究 ―大日本帝国政府及び朝鮮総督府による通信政策の比較分析を中心に―	東京大学社会情報研究所
尹碩儹	05.6.25 05.8.31	釜山大学校法科大学 法学科	助教授	日本及び韓国における満10歳以下児童の道路交通についての法的地位向上のための研究　―2002年8月から施行されているドイツの改正損害賠償法を参考に―	京都大学法学部
李明善	05.4.1 06.2.28	東京芸術大学大学院美術 研究科文化財保存学専攻	外国人 特別研究員	朝鮮古蹟調査による「古蹟」概念の成立過程に関する研究	東京大学大学院 人文社会系研究科
林志暎	05.4.1 06.2.28	前釜山大学校博物館 保存科学室	研究員	古代韓日象嵌技法の研究	奈良大学大学院 文学研究科
鄭載旭	05.4.1 05.9.30	昌原大学校 社会科学大学行政学科	教授	日本における高齢者福祉政策としての介護保険制度の導入・運営および見直しに関する研究　―韓国における制度援用の可能性の模索を中心に―	大阪市立大学大学院 生活科学研究科
鄭洪周	05.9.1 06.7.30	成均館大学校経営学部	教授	日本と韓国の金融統合比較研究	早稲田大学商学学術院
車承棋	05.10.1 06.8.31	延世大学校国学研究院	研究教授	帝国　―植民地の思想連鎖と文化政治学―	東京外国語大学 外国語学部
崔光準	05.4.1 05.6.30	新羅大学校人文社会大学 外国語学部日語日文学科	教授	萬葉集の地理学的研究　―東国地方を中心として―	東京学芸大学大学院 人文科学系
崔妍	05.4.1 06.2.28	嶺南大学校文科大学 東洋語文学部	教授	日韓近代女流小説に現れた女性人物像 ―林芙美子と崔貞熙を中心に―	東京大学大学院 総合文化研究科
許芝銀	05.4.1 06.2.28	京畿大学校	講師	17世紀初頭の韓日国交回復時の徳川政権の対応 ―探賊使・松雲大師惟政をめぐる史料調査―	京都造形芸術大学 歴史遺産学科

訪 韓

（50音順）

氏 名	開始日 終了日	所 属	職 位	研究テーマ	受入機関
生越直樹	05.5.16 05.9.15	東京大学大学院 総合文化研究科	教授	現代韓国語における「ことばのゆれ」と変化の方向性	ソウル大学校 韓国文化研究所
西野純也	05.4.1 06.2.28	延世大学校 社会科学大学院政治学科	博士課程 修了	韓国産業政策における日本的要素の導入と変質に関する政治経済学的研究	延世大学校付属 統一研究院
山田良介	05.5.1 05.10.31	九州大学 韓国研究センター	研究員	朝鮮半島における日本人居留民の研究　―朝鮮の「近代化」との関連で―	高麗大学校民族文化研究院韓国史研究所

※所属機関・職位は申請時点のものを掲載しています。

交流エッセイ

「日韓」から「東アジア」の視点へ

森美術館学芸部・キュレーター　金善姫

日本とのご縁

私が東京で働きはじめてようやく２年半が過ぎたが、日本とのご縁は、1996年の初来日からもうすぐ10年になろうとしている。いま、数え切れないほど多くの外国人が、さまざまな形で日本と関わっているが、私と日本との関係を考えるとき、「縁」という言葉が自然に口をついて出る。これも、他の国には感じられない独特な感情を日本に抱いているからだろう。

思えばアメリカでも５年あまり暮らし、仕事上、外国に行く機会も多い私だが、日本に対する印象は初めから何かが違った。そして、強く望んだわけでもないのに、いつのまにかここまで来たのは、決して偶然だけではない気がする。日本語もきちんと習ったことのない私が、日本の地で仕事をするまでになろうとは、以前の私には想像もつかないことだった。

今では異邦人という意識も希薄になり、日本人の同僚たちと苦楽をともに分かちながら特段に不便もなく過ごしている。日本の豊かな文化と美しい自然を愛するようになり、初めは馴染めず不思議だった日本の生活や習慣にも、しだいに親近感を覚えるようになってきた。時にはハワイアンのようにフラダンスを踊る日本女性に仲間入りできたような気持ちになる。

しかし、日本での私の生活はシンプルで、身近な範囲に限られている。最近は、仕事中心の生活で、住まいと職場の両方が都心にあり旅行も大部分が仕事のための海外出張で、新しい日本を体験する機会がなかった。だから、私の日本での経験は、現代美術分野以外では多くはない。以前、私の日本に対する知識は、数冊の本に頼るのみだったのだが、最近はテレビをよく見るようになり、日本の大衆文化にも身近に接するようになった。これからは機会をとらえて、もっと日本をじかに体験していきたいと考えている。せっかくの日本とのご縁を大切にし、日本を深く理解してゆきたい。

「日韓」から「東アジア」へ

現在、森美術館で開催している「秘すれば花：東アジアの現代美術」展（3月29日～6月19日）の企画にも、私が韓国を離れ日本に暮らす中で感じたことが、大きく働いている。今回の展示が、東アジア美術を対象とした企画となっているのは、日本での経験が東アジアの問題をあらためて考える契機となったからだ。韓国、日本にとどまらず、中国および台湾を含め、より広い視野で見ることができるようになったばかりでなく、共通点と相違点がより明確に区別できるようになったのである。さらに最近の中国をはじめとした東アジアの急激な変化の状況と、東アジアの新しい変貌を考えると、時期に適った企画であると自負している。

今回の展覧会のタイトルである「秘すれば花」は、先に“The Elegance of Silence”という英語のタイトルが決まった際に、その日本語をどう訳せばよいか美術館のスタッフで相談し考えた結果決まったタイトルだ。今回の展示は、基本的に東アジア現代美術と伝統文化との関係に比重を置きつつ、ひいては、西洋美術と東アジア美術の間に横たわる問題を提起している。東アジア美術が、わずか100年あまり前に流入した西洋美術に置き換えられていく中で、東アジアに深く根ざした伝統が果たしてどのような関係を持ってきたのか、また、日常生活やものの考え方が少しずつ西欧化されていく状況において、伝統的なものがどのような意味を持つのか、問いかけている。

展示の具体的なアプローチは、「山水」と「風水」という２つの小テーマに分かれている。第１部の「山水」では、戸外の自然、たとえば山、川、空、家、木や岩といった自然の伝統的な表現に関連する作品を展示し、第２部の「風水」では、茶室、居間、寝室、ダイニングルーム、お手洗いといった建築内部の要素に関連した作品が見られる。また、設置方法に関しても、西洋式の規格化されたホワイトキューブ方式を避けて、風水をあてはめ、ギャラリーを最大限オープンにしながら、作品が互いに有機的な機能を持つようにした。なぜならこの展示は、東アジア美術に主体的な視点で光を当てることに意味があるからである。西洋によって規定され、評価されるという、既存の構図を離れ、私たち自身の美術について、対話を引き出すよう意図したものである。

今回の展示には日本、韓国、中国および台湾から26名の作家が参加している。

丸山直文
《Butterfly song》
2004 260×260×5cm
アクリル、綿布
協力：シュウゴアーツ
作家蔵

スゥ・ドーホー《ソウルの家／L.A.の家／NYの家／バルティモアの家／ロンドンの家／シアトルの家》
1999　シルク　378.5 x 609.6 x 609.6 cm
Installation at P.S. 1 Contemporary Art Center, New York.
Collection of Museum of Contemporary Art, Los Angeles.
Photo Courtesy: Lehmann Moupin Gallery, New York.

日韓友情年2005記念事業
秘すれば花：東アジアの現代美術
The Elegance of Silence
期間：2005年3月29日～6月19日
会場：森美術館（東京・六本木ヒルズ内）
企画担当：森美術館　キム・スンヒ

PROFILE

きむ　すんひ

2002年12月より現職。前職は光州市立美術館チーフキュレーター。第2回光州ビエンナーレのチーフコーディネーターとしても活躍。女性アーティスト活動にも注目しており、ソウルアートセンターで開催された第1回と第2回ウーマン・アート・フェスティバルをコー・キュレートした。1996年から2002年の間は忠南大学校にて教鞭をとった。　撮影：ホンマタカシ　写真提供：森美術館

2005年度 助成対象事業

2005年度の助成事業の募集には133件の申請があり、この中から、上半期・下半期あわせて42件への助成が決定しました。これらの事業は日韓友情年2005記念事業にも該当します。各事業の詳細は日韓友情年2005公式ウェブサイトで紹介されています。http://www.jkcf.or.jp/friendship2005/

青少年・草の根交流（日韓共同未来プロジェクト）　21件

事業名	申請団体	実施時期	場　所
日韓青少年文化交流研修活動2005	財団法人 こども教育支援財団	2005/5/23 - 5/28	近畿地方
BRAVO！（ブラボー！）	Site - A（サイト・エー）	2005/5/27 - 7/31	ソウル・GA Gallery、 東京・HIGURE17-15cas
2005「南北コリアと日本のともだち展」	「南北コリアと日本のともだち展」 実行委員会	2005/6/29 - 7/6	東京都児童会館
青森ねぶた韓国公演囃子方・ ハネト講習会実施事業	日韓友情年2005、青森・ソウル便10周年記念青森ねぶた韓国公演実行委員会	2005/6月下旬 - 8月下旬	ソウル
環太平洋韓国研究コンソーシアムを活用した 日韓青少年によるオーラルヒストリー調査参加	九州大学韓国研究センター	2005/7/9 - 8/7	九州大学、高麗大学校ほか
日韓青少年交流訪韓団	日韓親善協会中央会	2005/7/24 - 7/29	ソウル、大田、木浦、釜山
日韓合同授業研究会第11回交流会 鬼怒川大会	日韓合同授業研究会	2005/7/29 - 8/1	栃木・塩谷郡藤原町ほか
日韓野外伝承遊び大会・日韓野外伝承遊び会議	社団法人 青少年交友協会	2005/7/29 - 8/7	ソウル、天安、釜山
第5回日韓高校生交流キャンプ	社団法人 日韓経済協会	2005/8（予定）	東京・新光証券(株)羽田研修センター（予定）
日韓学生合同ボランティア「漢江清掃大作戦」	特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会（IVUSA）	2005/8/1 - 8/8	ソウル、江原、忠北、京畿ほか
韓国法学生の日本受け入れ	The Asian Law Student's Association Japan	2005/8/1 - 8/8	東京、神奈川・鎌倉市
東洋画の次世代展望・韓国画と日本画 ー学生たちの試み	東京学芸大学	2005/8/1 - 8/21	東京学芸大学
＜日本ー在日ー韓国＞ユースフォーラム2005ー日韓の青年とNGOによる、マルチプル市民交流のモデルづくりー	＜日本ー在日ー韓国＞ ユースフォーラム・ジャパン	2005/8/4 - 8/8	大阪
日韓青少年友情＆우정キャンプ ～日韓合同祭りを創ろう～	財団法人 大阪キリスト教女子青年会（大阪YWCA）	2005/8/9 - 8/13	大阪YWCAほか
2005年慶應・延世・立教 リーダーシップフォーラム	慶應義塾大学国際センター	2005/8/18 - 8/23	慶應義塾大学、 神奈川・湘南国際村センター
「日韓友情年2005」記念 『玄海人交流音楽祭』（仮）	玄海人クラブ （韓国文化交流センター）	2005/8/19 - 8/22	佐賀、福岡
広島・釜山青少年囲碁交流（仮）	広島県日韓親善協会	2005/8/20 - 8/24	広島
日韓子ども里山体験交流事業	NPO法人 蒲生野考現倶楽部	2005/8/21 - 8/24	滋賀・しゃくなげ學校、琵琶湖ほか
教育大学学生の教育・研究交流プロジェクト	愛知教育大学・晋州教育大学 日韓教育・研究交流会	2005/9/5 - 9/11	晋州教育大学校
「空飛ぶ車いす」の里帰り	空飛ぶ車いすを応援する会	2005/9/29 - 12/31	岩手・盛岡市、東京・大田区ほか
日韓子どもシンポジウム2005	日韓子どもシンポジウム 実行委員会	2005/10/9	釜山

シンポジウム・国際会議　10件

事業名	申請団体	実施時期	場　所
日韓対話「東アジア共同体の展望と日韓協力」 Japan - Korea Dialogue : The Prospect of East Asian Community and Japan - Korea Cooperation	グローバル・フォーラム	2005/4/27 - 4/28	東京・虎ノ門パストラル

事業名	申請団体	実施時期	場　所
日韓共同学術会議「日本と韓国における文化と政治ー伝統・近代・ポストモダン」	政治思想学会	2005/5/13 - 5/16	京都大学
韓国外交協会との交流	社団法人 霞関会	2005/5/12 - 5/14	東京・虎ノ門パストラル
東アジア地域における労働市場の変化と労働法制パラダイムの転換ー日本・中国・韓国を中心に	韓国比較法学会	2005/5/20 - 5/22	ソウル大学校、韓国外国語大学校
日韓食文化フォーラム	ウーマンズフォーラム魚	2005/6/19	蔚山・クジラ博物館（5月開館予定）
日・韓次世代学術FORUM 2005 国際学術大会	東西大学校	2005/6/24 - 6/27	東西大学校
日韓歴史教育交流晋州シンポジウム	日韓教育実践研究会	2005/8/19 - 8/20	慶南・智異山自然学習院
日韓市民社会フォーラム2005	日韓市民社会フォーラム2005 実行委員会	2005/8/19 - 8/22	京畿・三星生命ヒューマンセンター
アジア共生学会国際シンポジウム	アジア共生学会	2005/9	福岡・北九州市立国際村交流センター
日韓教育行政学会共同セミナー	日本教育行政学会	2005/9/10	ソウル

芸術交流　11件

事業名	申請団体	実施時期	場　所
岩永善信ギターリサイタル	アトレ企画	2005/4/11 - 4/19	ソウル、昌原、堤川、大田
日韓友情年2005 記念公演 金梅子・創舞芸術院 舞踊公演「沈清」	魁文舎（かいぶんしゃ）	2005/4/17 - 5/1	福岡・北九州芸術劇場、滋賀・びわ湖ホール、東京・世田谷パブリックシアター
日韓友情年記念・コーリア切手展	日韓友情年記念・ コーリア切手展実行委員会	2005/4/22 - 4/24	東京・切手の博物館
日韓友情年2005「萬歳楽」韓国公演	特定非営利活動法人 ACT.JT（アクトジェイティ）	2005/4/26 - 5/1	韓国中央大学校、 ソウル・国立民俗博物館前広場
2005翁長洋子箏アンサンブル・日韓友情年記念企画～琉球と韓国 虹の橋かけて～	翁長洋子箏曲院	2005/5/23 - 5/29	ソウル・在韓国日本国大使館公報文化院、国立韓国芸術綜合学校伝統芸術院ほか
韓日女流書道展2005	國際藝術交流	2005/7/5 - 7/20	ソウル
日韓共同舞台制作	舞踏工房 若衆	2005/8/1 - 8/15	東京・神楽坂die pratzeほか
日韓友情年交歓コンサート in ソウル& in 東京	東京レディース・シンガーズ	2005/8/9 - 8/10、 10/5	ソウル・世宗文化会館、 東京・紀尾井ホールほか
韓日 自然・環境その模索と対案 ～未来は今日から～	有限会社 ティ・ケープランニング WWr9事業部「r」（アール）部門	2005/8/17 - 8/23	京畿・北漢江ギャラリー、ギャラリーソジョン、ヤンピョン美術館ほか
日韓友情年2005「民画展」	財団法人 日本民藝館	2005/9/6 - 10/30	ソウル市立歴史博物館
チョン・ミョンフン東京フィル 日・中・韓「未来へのフレンドシップ」ツアー	財団法人 新星東京フィルハーモニー交響楽団	2005/11/2 - 11/14	釜山、済州、果川、ソウル、仁川

下半期申請について

2005年度下半期（2005年10月より2006年3月まで）の人物交流助成申請は６月１日から７月１日までの期間で受け付けいたします。対象分野は上半期同様、「青少年・草の根交流」、「シンポジウム・国際会議」、「芸術交流」の３つとなります。募集要項と申請用紙をご希望の方は、基金ウェブサイトからファイルをダウンロードしてご利用ください。

日韓友情年2005

祝賀ムードの中「日韓友情年2005」華やかに幕開け

日韓友情年 2005

http://www.jkcf.or.jp/friendship2005/

今年1月末、日韓両国において「日韓友情年2005」のオープニング行事が開催されました。両国首脳が参席して両国国民に対するメッセージを伝えたほか、両国の伝統芸能やポップアーティストによる公演が友情年の幕開けに華を添えました。

1月25日東京での開幕式

「日韓友情年2005」のオープニング行事は、1月25日の東京での韓国側主催による開幕式とレセプションを皮切りに、27日のソウルでの日本側主催によるレセプション、28日の「スーパーライブ・イン・ソウル」、29日の「人形浄瑠璃文楽とパンソリ」交流公演（韓国公演）と続きました。

1月25日に東京で開催されたレセプションには小泉総理が参席し、交流事業を通じ「日韓の人々が一緒になって創造していく作業に深い価値を見出す」と述べ、日韓友情年2005への期待をメッセージとして伝えました。

27日にソウルで開催されたレセプションには、盧武鉉大統領が参席して挨拶を述べました。また、CHEMISTRYとLena Parkが、テーマソング「Dance with Me（Korea/Japan Ver.）」を披露し、素晴らしいハーモニーで日韓両国の友情と明るい未来を描き出しました。

28日には「日韓友情年スーパーライブ・イン・ソウル」と題し、両国のポップアーティスト6組が共演し、続く29、30日には、日本の文化庁と韓国の国立国楽院の共催で、人形浄瑠璃文楽とパンソリの交流公演が開催され、ポップミュージックから伝統芸能に至る両国文化交流の幅広さを示しました。

1月27日ソウルでのオープニングレセプション

オープニング行事

日本

1月25日（火）
開幕式（東京・国立代々木競技場第2体育館）
韓国伝統歌舞楽公演、ポップコンサートなど
レセプション（東京・帝国ホテル）

韓国

1月27日（木）
オープニングレセプション（ソウル市内ホテル）
日韓両国アーティストによる公演など

1月28日（金）
日韓友情年スーパーライブ・イン・ソウル
（ソウル・オリンピックホール）
CHEMISTRYほか出演

1月29日（土）、30日（日）
「人形浄瑠璃文楽とパンソリ」交流公演
（ソウル・国立国楽院）

テーマソング

写真提供：ソニー・ミュージックエンタテインメント

Dance With Me（KOREA/JAPAN Ver.）
CHEMISTRY & Lena Park（DefSTAR Record）
作詞：GAKU-MC、川畑要、堂珍嘉邦、Jihoon Kang
作曲：SPANOVA　編曲：河野伸

アーティスト紹介

CHEMISTRY（ケミストリー）
TV番組のヴォーカリストオーディションで選ばれた、堂珍嘉邦・川畑要の2人によるデュオ。CHEMISTRYの名は2人のヴォーカリストが生み出す「音楽的化学反応」に由来する。2001年のデビュー以来、スーパーヴォーカルデュオとして揺るぎない存在感を放ち続けている。

Lena Park（リナ・パーク）
韓国が誇るアジアを代表するアーティスト。米国ＬＡ在住。コロンビア大学英文科在学中。幼い頃からゴスペル・ミュージックに接し、音楽的才能を開花させる。1998年デビュー。2002年サッカーＷ杯の際、日本からCHEMISTRY、Sowelu等が参加した「Voice of KOREA/JAPAN」に韓国を代表して参加。

韓国側公式ウェブサイト

韓国側公式ウェブサイトでは、韓国側の実施体制の紹介のほか、韓国側諮問委員会が認定した記念事業を分野別に紹介しています。コラムなどの読み物も順次追加され、日本語での情報提供も行っています。

http://www.friendship2005.net

助成事業紹介

伝統音楽を通じた日韓交流
―「天のソリ・地のソリ」たざわこ芸術村研修―

「天のソリ・地のソリ」事務局　朱栄浩

※「ソリ」とは韓国語で「音、声、音楽」の意味

2000年にソウルで、劇団わらび座の是永幹夫代表にお会いしたことから、この交流が始まった。わらび座は秋田県に本拠地を置き、民族伝統をベースにした公演を行なっている劇団である。韓国で伝統音楽を学ぶ学生たちに、わらび座と冬の秋田を見せてあげたいという思いで計画を立て、ようやく３年後にこのプログラムを実現させることができた。

こうして、2005年１月６日から13日までの７泊８日、総勢48名の韓国側メンバーが秋田県仙北郡田沢湖町を中心とした地域を訪れ、研修と交流のプログラムを実施した。

民謡が結ぶ交流

わたしたち「天のソリ・地のソリ」は、韓国の伝統音楽の専門家が率いる伝統音楽の教育と公演を行なう団体である。この団体の特徴は、これまで伝統音楽界では扱われることの少なかった土俗民謡を、主な公演レパートリーに加えようとしているところにある。

韓国では15年前から、MBC文化放送の努力で、消えかけた土俗民謡が多く発掘・記録されてきたが、伝統音楽界において土俗民謡をどのように活用していくかが、現在の課題となっている。日本と韓国には似ている点が多いが、土俗民謡においても両国の共通点は非常に多い。アジア地域において、土俗民謡・労働民謡が豊富な国として数えられるのが、まさに日本と韓国である。

今回のプログラムの一環として、1月7日にたざわこ芸術村において開催された「大韓民国江原道・日本東北地方労働民謡比較講義及び研修」は、規模こそ小さいが、両国の民謡専門家が一つの場に集まり、土俗民謡を比較し議論を交わすという、これまでにあまり類を見ない試みである。土俗民謡は文字どおり、その土地の人々の情緒と芸術性が織り込まれた芸術であり、両国がお互いを根本から理解できるきっかけを与えてくれる。たざわこ芸術村の(財)民族芸術研究所と韓国の文化放送が、数年前から民謡資料を交換してきたことが、今回の共同セミナーの土台となった。

秋田の人々とのふれあい

1月8日には、「日韓伝統音楽演奏交流会」が秋田市民交流プラザで行なわれた。ここでは両国の出演者がそれぞれの伝統音楽を演奏するとともに、韓国の伝統楽器による秋田民謡の演奏も行なわれた。公演後、両国の若者たちが言葉を交わし、語りあう姿は、音楽を通じての交流を実感させるものだった。秋田市民のみなさんも、３時間あまりに及ぶ長い公演が終わるまで、席を立たずに観覧してくださった。伝統芸術を大切にし、はぐくむ秋田の風土を感じることができた。

わらび座メンバーとの交流も、韓国側メンバーには大きな刺激となった。日本国内でも独自の位置を占めている劇団わらび座が、どのような人々によって支えられているのかを間近に見ることのできる機会であり、公演の舞台裏でのスタッフたちの一糸乱れぬ動きにプロ意識を感じ、大きな刺激を受けた。

今回のプログラムにより、韓国側のメンバーは多様な体験を通して、音楽家として成長する糧を得たように思う。それとともに、両国の交流と相互理解において伝統音楽の持つ可能性を実感できた８日間だった。

1月8日の演奏交流会。たくさんの秋田市民が集まり、両国の若者たちの演奏に耳を傾けた

韓国側参加メンバーのコメント

●初めて知ることがとても多くありました。今回、経験したことが私の音楽に新しい色を加えてくれるようで、わくわくします。(高校生・女)

●視野が一気に広がりました。わらび座や日本の高校生の公演を見ながら、これが音楽を楽しむということなんだと感じました。(大学生・女)

●一番記憶に残っているのは、わらび座の団員からソーラン節を習ったことです。聞くだけでなく、リズムに合わせて体を動かすことで、日本の音楽をより身近に感じました。(大学生・女)

日　程

1月 6日	秋田到着、たざわこ芸術村見学、楽器練習
7日	大韓民国江原道・日本東北地方労働民謡比較講義及び研修、楽器練習、講義
8日	日韓伝統音楽演奏交流会、講義
9日	雪道散歩、楽器練習、わらび座スタッフとの交流会、講義
10日	楽器練習、わらび座団員との交流会、講義
11日	仙北郡北浦地区での交流会(日本文化体験)、講義
12日	田沢湖・角館訪問、討論会
13日	帰国

PROFILE

ちゅ　よんほ

「天のソリ・地のソリ」事務局を担当。1995年以来、日韓間の文化交流のコーディネーターとして活動のかたわら、サッカー記者としても多くの取材に当たった。2000年から2004年まで劇団わらび座の韓国における活動のコーディネートを行った。

フェロー研究紹介

親子心中の日韓比較に関する歴史民俗学的研究 ―民俗文化と近代家族の変容

東京大学大学院総合文化研究科助教授　岩本通弥

美名に隠された子殺し

日本に親子心中と呼ばれる現象があるのは周知のことであろう。子殺しの後、親が自殺する行動であるが、この言葉には殺人という行為が美名の下に隠されている。この語は大正12、3年頃から新聞紙上に登場しはじめるが、1920年代にこの現象が激増し、社会問題化したことと関わっている。社会的なプロテスト（庶民の悲鳴）のほかに、この語には自身も同じ状況に置かれたら、子殺しを行うかもしれないという同情、共感が含まれている。心中とはいっても、そこに子どもの意思は問われていない。無理心中という言葉がこれに近いが、わざわざ親子無理心中と呼ぶことは少なく、問題を解く一つの鍵は、この観念の成立を正しく捉えることにある。

歴史的にいうと、それまでの日本社会では親子心中という現象はほぼ皆無に近かったといってよい。ある家族が家庭不和や経済的貧困などに追い込まれた場合、以前はもっぱら捨子という手段が採られていたからだ。たとえ親は自殺しても、子どもは親族や他人に委ねるようなシステムが存在したからで、親の自殺と子殺しはプラスの関係で結ばれてはおらず、かつては親の自殺や家出あるいは子捨て・子殺しにより、家族の崩壊も回避されていた。親子心中という現象が激増するのは、捨子をしても子どもを養ってくれる「家」が消滅したこと、すなわち商家や農家の経営形態が変化し、捨子を受容していた「家」の基盤が崩れたこと（例えば以前の商家には、丁稚奉公のように、他人の子どもを住込みでしつける慣行があった）、また近代学校制度等の発達により、子どもの養育はすべて生みの親が責任を負うようになったことに基因している。我が子を残して親だけ自殺することは、捨子と同様に、親の責任放棄として社会的に非難されるようになったのであり、これは「他人に迷惑をかける」ことを不可とする社会規範が、近代日本の中で形成されていったことと深く関わっている。

最近の日本では親子心中を「事件」としてマスメディアが取り上げることが激減し、一見、減っているかのような錯覚に陥るが、1920年代以降、第２次大戦の戦時前後を除けば、毎年、年間300～400件以上の親子心中が起こっている。今でも毎日１件以上日本のどこかでそれが繰り返されているが、その意図があっても、子殺しだけで、親の自殺まで至らなかった未遂を含めれば、その数値は数倍になると推定できる（犯罪統計などには、親子心中という項目はないので、以上は計算上の推計である）。また近年は、最初から親には自殺意図のない、子殺しだけの、児童虐待の究極の延長ともいえる形態が増えているのも確かである。しかし、両者の境界領域は曖昧で、これを動機の次元で区分することは方法的に困難である。

親子心中と同伴自殺

さて、韓国でも日本の親子心中に相当する現象が、1980年代以降に社会問題化する。一般に「同伴自殺」と呼ばれるが、ここにも子殺しという行為が、その言葉に隠蔽されている。筆者の研究視角は、まずいつから「同伴自殺」という言葉が韓国社会で使用されはじめたのか、またそれはどういう社会－文化的要因なのかを、民俗学的・文化人類学的に考察することである。図のようなモデルを作成して、何が促進／回避要因として働くのか、それぞれの歴史的変化も視野に入れて考察している。

ここで一つ注意しておくのは、親子心中＝同伴自殺でないことである。日本のそれは、母子心中、父子心中、あるいは一家心中と呼ばれるように、親子やいわゆる家族が単位になっている。一方、韓国の同伴自殺の場合、親子に限定されることはない。祖父母という直系親族や、日本でいうオジ（伯父・叔父）やオバ（伯母・叔母）といった拡大家族が含まれたり、あるいは他人である近隣住民を巻き込むケースも多いため、同伴自殺と命名される。そもそも日韓では家族（family）の観念がずれており、日本の親子心中を精確に翻訳すれば、父母－子息同伴自殺ということになる。しかし、そんな言葉は韓国にはない。

もう一点注意が必要なのは、精神医学者らが説くように、親が子を殺した後に自殺する行為自体は、欧米でもどこにでもある現象で、歴史的にも古く遡れる普遍的行為だという点である。例えば北米の場合、自分を離れた、また離れようとする妻や愛人、及びその子を殺害し、その直後男性が銃やピストルで自殺するケースが多い。しかし、欧米の場合には、それが突発的な精神抑鬱の兆候とされ、野蛮な行為あるいは犯罪行為の範疇で見做されるのに対し、日韓の場合、それが親子心中や同伴自殺という表現で、ここに「自分自身の姿」を見て、ある種の合理性を与えてきた点である。

すなわち社会－文化的に「許容」されはじめたからこそ、こうした現象も多発化するのであり（ただし韓国の場合、年間50～60件レベルといってよい）、そもそも残される子どもが不憫だといった、これを惹き起こす動機の背後にあるものが欧米などとは異なっている。つまり筆者の課題は、行為としての親子心中ではなく、それを社会的に「許容」する文化的土壌が日韓の近代化の過程の中でどう構築されていったのか、その問題設定自体が違っている。

情死・集団自殺・同伴自殺

このように「行為レベル」と「社会－文化レベル」に視角を区別して、1920年創刊の東亜日報・朝鮮日報の記事を分析してい

くと、1922年8月16日の記事に既に「三母子が投身」という行為があったことがわかる。この記事は淡々と事実を伝えるのみで、評価まで把握できないが、当時の類似事件の記事内容が、どう記述されているか、その書き方に顕れた評価を分析して見ると、例えば1923年5月11日記事のように、「乳児を残したまま」と、自殺した女性を非難するような表現をしばしば見ることができる。儒教的な規範では「身体髪膚父母よりこれ受く」であって、自殺自体も罪悪視されていたが、乳児を残すということにも批判の眼が向けられていた。

既に日本の植民地下にあって、日本での自殺事件が盛んに報道される中で、心中という近松門左衛門以来の男女の情死を美化するような価値観のなかった韓国においても、韓国人同士のそれも、漸次「情死」と表現されるように変わる。有名な事件で一つの画期となったのが、1926年８月４日のソプラノ歌手尹心悳（ユンシムドク）と劇作家金祐鎭（キムウジン）の情死事件で、当初新聞は「前途多望な青春男女の軽率な死」と厳しかったが、センセーショナルに扱われて「死の賛美」が起こり、従来の儒教規範には見られなかった、死を美化する意識が芽生えはじめる。

また1920年代、日本での母子心中記事も頻繁に紹介される中で、当初は「至毒（チドク）ハダ」という表現で、何て酷（むご）いのかという否定的な評価が多かったのが、次第に日本の意識との接近が見られてくる。それが明確な形で現れるのは、1960年代になって、近親者による子殺しを伴う自殺に対し、「集団自殺」という名称を付与するようになってからである（初出は1960年3月12日）。集団自殺という言葉は、他人との関係も含むため、1970年代に入ると、それとの差異化を図って、これを「同伴自殺」と呼びはじめる（初出は1970年６月23日）。1980年代のその流行＝社会問題化もこれと深く関わっていよう。ただ、1990年代までは日本の親子心中と比較したとき、韓国の特徴の一つは父親中心主義的な同伴自殺の多かった点である。研究論文の統計の取り方によってずれはあるが、日本では親子心中の総数の6〜7割は母子心中という母－子の関係である。それに対し、韓国では父親が失職するなどで、経済的苦境に立たされたとき、父親の心的苦悩から妻子を巻き込むタイプの拡大自殺も多かった。

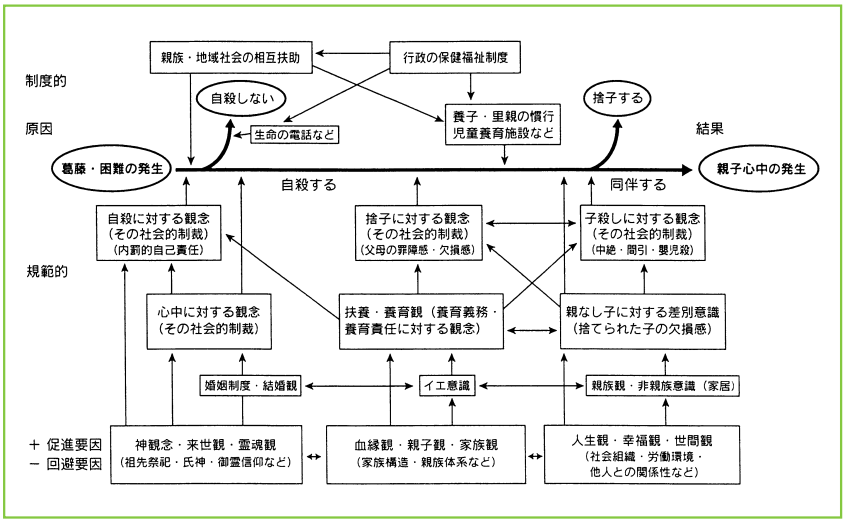

図　親子心中（同伴自殺）発生過程の社会的要因モデル

父親中心主義から母子中心へ

しかし2000年代に入って、どうも韓国社会でも母子同伴自殺の割合が増える傾向が見受けられる。その典型は2003年７月17日に起こった主婦の三子女殺害であり、アパートの屋上から投身しようとする母親に対し、娘がサリョチュセヨ（お母さん、殺さないで）と懇願した事件である。この娘の言葉が韓国社会にかなり大きな衝撃を与え、テレビ番組でも盛んに特集が組まれた。

母子同伴自殺の増加傾向は、こう解釈が可能である。かつての韓国の父系的親族体系では、たとえ父親（アボジ）が死んでも、クナボジ（大きいお父さん）やチャグンアボジ（小さいお父さん）と呼ばれる父親の兄弟が、死者の配偶者と子どもの面倒を見ることになっていた。しかしその関係性が崩れはじめつつある兆しなのではないかと推定できる。これを実証することは難しいが、祖先祭祀の２大機会である秋夕（お盆に相当）と正月の省墓（墓参）の実態を、ソウル市立墓地で観察・分析すると、儒教的規範とは違い、秋夕（その前後一週間を含む）に訪れなかった家族が４割方もあることが分かってきた。

ソウル市では1997年に土葬墓の供給を停止し、火葬への転換を図り（全国の火葬率も1996年23%が2004年には50%超に上昇）、当初は納骨堂を供給したが、その供給も停止し、今は散骨を奨励している。日本以上に合計特殊出生率が低下（2002年1.17人）するなど、韓国の家族－親族関係は今、歴史的な大転換期を迎えている。

PROFILE
いわもと　みちや

東京大学大学院総合文化研究科文化人類学コース助教授。昨年7月23日から今年3月31日まで中央大学校文科大学日本研究所に招聘研究員として滞在。著編書に『覚悟と生き方』（筑摩書房、1999年）、『現代民俗誌の地平3 記憶』（2003年）などがある。

日韓文化交流基金事業報告

1月～3月

日韓共同研究フォーラム

日韓共同研究フォーラムの第２次研究タームの成果として、「日韓共同研究叢書」の第10・11・12巻が慶應義塾大学出版会から刊行されました。

社会学チーム

第10巻 『韓国社会と日本社会の変容
―市民・市民運動・環境』
（服部民夫・金文朝編）

地域ガバナンスと市民運動、NPOと政府の関係、家族制度と法（同姓同本不婚制度など）の現状と展望を示す。

歴史１チーム

第11巻 『韓国・日本・「西洋」
―その交錯と思想変容』
（渡辺浩・朴忠錫編）

19世紀半ば以降の日本と韓国を中心として、変転する東アジアにおける文化・思想の問題をさぐる。

歴史2チーム

第12巻 『近代交流史と相互認識Ⅱ
―日帝支配期』
（宮嶋博史・金容徳編）

日本植民地期朝鮮における両国の相互認識を、当時の同化政策、大学教育、朝鮮地方自治などから解明していく。

「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

韓国図書翻訳出版事業により、「韓国の学術と文化」シリーズの以下の図書が法政大学出版局より刊行されました。

『私の文化遺産踏査記Ⅲ
―語らないものとの対話』
（兪弘濬著、大野郁彦訳）

扶余・公州などに残る百済の美学、慶州仏国寺が代表する統一新羅の調和美、安東文化圏に色濃く残る朝鮮王朝時代の両班文化、智異山周辺などの古刹に息づく山寺の美学。これらのエリアの寺院・書院・仏像・仏塔・墓碑・庭園・古墳・韓屋等々を巡り、その美学と建築的・園林的思考の軌跡を探る。

『韓国経済発展のダイナミズム』
（趙淳著、深川博史監訳、藤川昇悟訳）

開発経済から先進国経済への移行過程の問題点を産業、労働、金融、貿易の各分野にわたって克明に検討しつつ、韓国経済の特徴を「圧縮成長」として位置づけ、労働力不足や高賃金、労働集約的な産業の衰退など、韓国経済の構造的問題点を指摘する。

『韓国の民家』（申栄勲著、西垣安比古監訳、李終姫訳）

『朝鮮民族解放運動の歴史』（姜萬吉著、太田修監訳、庵逧由香訳）

図書出版助成

『日本の朝鮮統治と国際関係
―朝鮮独立運動とアメリカ1910－1922』
（長田彰文著）平凡社

初めて国際政治史の視点から見た日本の朝鮮統治と朝鮮独立運動の研究。とりわけ第一次世界大戦後、民族自決主義を掲げ国政政治における発言力を強めたアメリカに対して、朝鮮独立運動が期待を寄せながら、アメリカが日本の朝鮮統治を容認するに至って、朝鮮独立運動は分裂し、次第にソ連寄りになっていく経緯が明らかにされる。

『韓国文学はどこから来たのか』
（李在銑著、丁貴連・筒井真樹子訳）白帝社

韓国文学とは一体何なのか。韓国文化・韓国人の精神世界はどのようにして形作られたのか。韓国の神話・伝説・歴史書・古典小説・時調から現代小説・現代詩に至るまで、多くの作品を引用しながら韓国文学のルーツをたどる。
（原題『韓国文学主題論』西江大学校出版部・1989年）

訪日団

団体名	団　長	計	男	女	期　間	訪問校
済州青年	金貴珍 KCTV済州放送編成制作局 局長	20	11	9	1/11－1/20	松山大学
釜山日本語弁論大会入賞者等	李貞熙 威徳大学校日本語学部 教授	19	9	10	1/11－1/20	島根大学

和楽器（太鼓）の打ち方を習う済州青年訪日研修団員

訪韓団

団体名	団　長	計	男	女	期　間	訪問校
大学生（3）	野副伸一 亜細亜大学アジア研究所 教授	20	10	10	3/1－3/10	慶熙大学校、嶺南大学校
大学生（4）	木村健二 下関市立大学経済学部 教授	20	7	13	3/15－3/24	弘益大学校、慶州大学校

日韓ボーイスカウト交流事業

（財）ボーイスカウト日本連盟への委託事業である「日韓ボーイスカウト交流事業」が1月8日から17日まで9泊10日の日程で行われ、韓国の中高生ボーイスカウト100名が来日しました。韓国ボーイスカウトは、日韓スカウトフォーラムのほか、長野でのウィンタースポーツ体験、関西でのホームステイを通じて、日本のボーイスカウトと交流を深めました。

日韓スカウトフォーラムでのグループ討論

日韓ボーイスカウト交流日程

1/8－1/10	成田空港到着、日韓スカウトフォーラム（千葉県） 開会式、仲間作りプログラム、基調講演、パネルディスカッション、分科会、全体会など
1/11－1/13	ウィンタースポーツ体験（長野県）
1/14－1/16	ホームステイ（京都、滋賀、兵庫に分かれて） 京都市内見学、各家庭別プログラム、歓送夕食会
1/17	関西空港より帰国

報告書

以下の派遣事業報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

- 大学生訪韓研修団（2004年3月16日～3月25日）報告書
- 大学生訪韓研修団（2004年9月7日～9月16日）報告書
- 大学生訪韓研修団（2004年11月16日～11月25日）報告書

図書センターの利用者登録方法が変わります

図書センターでは、2005年4月1日以降、新たに利用登録を行う方については、登録時に1000円の利用登録料をいただいて利用カードを発行することとなりました。新しい利用カードの有効期限は、1年間となります。既に利用カードをお持ちの方については、有効期限終了後の更新の際に登録料をいただくこととなります。

新制度で利用登録された方に限り、このたび新たに開始した郵送による複写サービスが受けられます。

日韓文化交流基金 維持会員制度のご案内

当基金の活動と財政を広く民間の方々に支援していただくため、個人会員、法人会員および特別会員からなる会員制度を設けました。
日韓の文化交流にご関心のある皆さまのご入会をお待ちしております。

日韓文化交流基金は、経済界のご協力のもと、外務省の認可を受けて1983年に設立された財団法人です。以来、日韓両国民間の文化交流を強化し、相互理解と信頼関係を築くことを目的に、青少年交流や学術交流など、さまざまな交流事業を実施してきました。多くのご理解に支えられ、設立以来当基金が蒔いてきた交流の種は、いまや両国社会において花を咲かせつつあると自負しております。
しかしながら、当基金は昨今の経済情勢の変化などから財政的に極めて困難な状況にあり、今後当基金の運営と活動の継続・発展を図るためには、広く各位のご協力に頼らざるを得ない次第であります。このため私どもは日韓国交正常化40周年を迎える2005年より、今後の日韓文化交流事業のさらなる発展を期すため、維持会員制度を発足し、財政上のご協力をお願いすることといたしました。
常日頃からご厚情を賜りながら、さらにご協力を願うのは誠に心苦しいところではございますが、当基金の現状をご理解いただき、自主財源の確立および事業に必要な資金調達として、維持会員加入による会費のご協賛を賜り、一層の発展を願う次第であります。有志各位におかれましては、当基金の趣旨にご賛同され、さらなる日韓文化交流の発展にご支援願えれば誠に幸甚に存じます。

平成17年４月
財団法人　日韓文化交流基金
会　長　　藤村　正哉
理事長　　内田　富夫

年会費

（1）個人会員　１万円　　（2）法人会員　10万円　　（3）特別会員　5万円
※１口以上何口でもご入会いただけます。随時受付します。

会員特典

（１） 広報誌『日韓文化交流基金ＮＥＷＳ』を1年間お送りします。
（２） 日韓文化交流に関するニュースやお知らせなどを、電子メールのメールマガジンでお届けします。
（３） 基金が実施する各種催しの参加案内をお送りします。
（４） 基金図書センターを優待でご利用になれます。
（図書センター登録料無料、複写請求サービス料金割引。法人会員は５名まで登録できます。）
（５） 特別会員には、基金が実施する韓国視察団参加のご案内をいたします。

年会費のお支払い

便利な郵便振替口座をご利用ください。
口座番号　00160－9－668460
口座名称　財団法人 日韓文化交流基金
振込票通信欄には、氏名、ご住所、ご連絡先電話番号のほか、①希望する会員種別（個人、法人、特別）②申込口数　③メールアドレス　④図書センター登録希望の有無をお書きそえください。

お問い合わせ

日韓文化交流基金「会員制度」担当
TEL 03-5472-4323 / FAX 03-5472-4326　E-mail webmaster@jkcf.or.jp